

中国語母語話者による
“在”と“有”構文における定・不定の認知
Recognition of (in)definiteness in sentences
with *zai* and *you* verbs by native Chinese speakers

張婧禕（名古屋大学大学院人文学研究科・助教）

ZHANG Jingyi

玉岡賀津雄（名古屋大学大学院人文学研究科・教授）

TAMAOKA Katsuo

Abstract : Previous studies proposed that subjects in Chinese exclusively use definite nouns for expressing already-known information. To investigate this claim, the current study conducted a 1-7 point scale of acceptability judgments for (in)definiteness in *zai* and *you* sentences using 81 native Chinese speakers. The survey contained 36 sentences based on the 12 categories defined by Zhang and Tamaoka (2016) and 6 dummy sentences. A regression tree analysis indicated that the strongest predictor for acceptability judgments was (in)definiteness in objects, which was followed by subjects. Unlike previous studies, this study demonstrated (in)definiteness in subjects isn't the crucial factor for Chinese acceptability judgments.

キーワード : 定形 不定形 “在”と“有”構文 容認度判断

1 はじめに

これまで中国語の構文においては、既知の情報を文の前に置き、未知の情報は文の後に置くといわれていた（刘月华等 2004）。そのため、多くの先行研究が、主語は定形、目的語（“宾语”）は不定形で表すという主語定形説を採ってきた（朱德熙 1982；刘月华等 1983、2004 など）。「存在文」の“在”と“有”構文について木村（2011）は、“有”構文が未知の物事の存在を表すため、存在対象は「数詞＋量詞」の組み合わせを伴い不定形をとり、“在”構文は既知の物事の存在を表すため、存在対象は定形をとると指摘している。中国語の品詞には、定詞（冠詞）という分類はないが、名詞の

前に指示詞である“这/那”（この/その・あの）を用い、その名詞の定性を表すことができる（范继淹 1985；刘月华等 2004）。一方、不定形の名詞を主語とする文は多く存在するが、その場合、述語部の動詞は複雑な構造をとらなければならないといわれている（范继淹 1985）。以下、“在”および“有”構文を対象に、主語と目的語にそれぞれ定形・不定形を組み合わせた文例によって、先行研究の主張を考察する。

“在”構文の場合：

- (1) 那本书在桌子上。
- (2) ? 那本书在那张桌子上。
- (3) * 一本书在那张桌子上。
- (4) ? 一本书在桌子上。

(1) の場合、主体（主語）の構成順は、指示詞の“那”（その・あの）の後に、量詞の“本”（冊）、名詞の“书”（本）の順となり、定形に相当する。場所を表す目的語の“桌子上”（机の上）は、名詞の“桌子”（机）と方位詞の“上”からなるものである。これは、指示詞のような限定できるものを伴わないため、不定形に相当する。

(3) の主語“一本书”（一冊の本）は、“一”が英語の不定冠詞の a に相当し、句の主要部の“书”（本）が続く。これは、「数詞＋量詞＋名詞」の構造で不定形をとる。しかし目的語の“桌子上”（机の上）の前には指示詞“那”（その・あの）と量詞の“张”（台）が続くので、定形となる。

先行研究（朱德熙 1982；刘月华等 1983、2004 など）の主張から予想すると、(1) のような主語が定形で、目的語が不定形である場合は容認度が高い。しかし、(3) は主語が不定形で目的語が定形の簡単な構造の文であるため、容認度は低くなり、非文とみなされる。一方、(2) の場合では、主語と目的語がそれぞれ指示詞をとるので“那”（その・あの）と量詞“本”（冊）、“张”（台）を付け、定形にした文である。(4) の主語は、「数詞＋量詞＋名詞」の構造で、目的語は何も付けない裸名詞にした。いずれも不定形に相当する表現である。(2) と (4) の区別は、主語と目的語が同時に定形あるいは不定形をとるかかどうかである。先行研究（朱德熙 1982、1999、2000；刘月华等 1983、2004 など）はこのようなケースについて言及していない。しかし、実際には、必ずしも使用されないとはいえず、このような文に対する容認度は不明である。

したがって、主語または目的語が定形・不定形のいずれをとるかによって容認度が異なることが予想される。

また、同様に、“有”構文の場合：

- (5) 桌子上有一本书。
- (6) * 桌子有一本书。
- (7) 那张桌子上有一本书。
- (8) 桌子上有那本书。
- (9) ? 那张桌子上有那本书。

主体（主語）としての場所表現では、(5)の“桌子上”（机の上）のように、場所を表す名詞の直後に“上”、“里”、“下”など、方位詞と共に使用しなくてはならない。方位詞“上”を省いた(6)の文は非文になることから、主語の句となるためには、方位詞が要求されるといえよう。このような“有”構文における方位詞使用の有無については、すでに張婧禕・玉岡（2016）が分析している。また目的語である“书”（本）は“有”構文では、不定形をとらなくてはならない（朱德熙 2000）。(7)では、主語は“那张桌子上”のような「指示詞＋量詞＋名詞（方位詞付加）」の構成で定形をとり、目的語は“一本书”（一冊の本）のような「数詞＋量詞＋名詞」の構成で、不定形に相当する。(7)と異なり、(5)の主語に位置する“桌子上”（机の上）の前には指示する成分がなく、不定形に相当し自然な文として成立する。

(8)の目的語“那本书”は、“那”（その・あの）、量詞の“本”（冊）、そして“书”（本）となり、定形になるが、主語が場所表現をとる“有”構文では、自然な文とされる（于善志等 2011）。そのため、(8)は(5)と同じ容認度であると予想する。また、(9)のように主語と目的語、いずれも定形にすると一般的に容認度は落ちるが、こういう表現が存在しないというわけではない。

以上のように、(5)は不定形で(7)は定形であり、主語が定形をとるかどうかの違いである。(5)と(7)はいずれも自然な文とされるので、いずれも容認度が比較的高いと思われる。(8)は主語が不定形で、目的語が定形、(9)は主語と目的語が共に定形である。いずれも中国語母語話者の会話で使われるもので、非文とはいえない。そのため、容認度は必ずしも高くはないものの、容認されないというほど低くはなら

ないであろう。したがって、先行研究（朱徳熙 1982; 刘月华等 1983、2004 など）の主語定形説の主張と一致しない可能性がある。

一方、張婧禕・玉岡（2016）では構文の意味から、“在”構文を（1）のような「空間位置関係」、 “有”構文は後置詞の使用有無によって（5）のような「空間領属関係」と “我有一本书。”（私は一冊の本を持つ。）のような「領属関係」に分類した。「空間位置関係」と「空間領属関係」のような意味関係は単純に「存在」という事象を表すだけではなく、対象物の空間的な位置または空間領属を描写すると考えられる。このように、不定形の名詞が主語となる時、場面を描写する機能を果たすといわれる（雷桂林 2008）。そのため、「空間位置関係」を表す “在”構文と「空間領属関係」を表す “有”構文の主語は不定であっても、容認度が低くはならないと予想される。そこで、本研究では、中国語母語話者を対象に、“在”と “有”構文における定・不定の認知を数値化する容認度判断調査を実施する。そして、複数の変数によって容認度を予測する回帰分析¹⁾の解析手法を用いて、以下の2点について検討する。第1に、母語話者による “有”および “在”構文における定・不定形の容認度から、母語話者による定・不定の認知状況を明らかにし、先行研究の主語定形説を検証する。第2に、両構文における容認度の違いを構文の意味関係から考察する。

2 調査方法

2.1 調査対象者

調査対象者は、日本滞在中または中国上海在住の中国語母語話者の81名である。女性51名で、男性は30名であった。平均年齢は27歳4ヶ月、標準偏差は3年8ヶ月であった。最年長は40歳1ヶ月、最年少は20歳6ヶ月であった。全員に対して、以下の容認度判断調査を実施した。

2.2 調査内容

本調査は張婧禕・玉岡（2016）の分類を参照した。この分類では、“在”構文は、「名詞句＋在＋後置詞句（方位詞付加）」の構造をとる。一方、“有”構文では、後置詞句内の方位詞の有無により、「後置詞句（方位詞付加）＋有＋名詞句」と「後置詞句＋有＋名詞句」に構造を分けた。このような分類に後置詞句内の定形・不定形および名詞句内の定形・不定形の違いを加え、本調査が持つ下位分類を表1に示した。具体

的には、「定形+在+定形」、「定形+在+不定形」、「不定形+在+定形」、「不定形+在+不定形」、「定形+有+定形」、「定形+有+不定形」、「不定形+有+定形」、「不定形+有+不定形」、「定形（方位詞付加）+有+定形」、「定形（方位詞付加）+有+不定形」、「不定形（方位詞付加）+有+定形」と「不定形（方位詞付加）+有+不定形」の3分類12構文である。これらの12構文についてそれぞれ3文作成した（合計36文）。さらに、ダミー文として正用文と誤用文各3文の合計6文を加えた。したがって、調査紙は42文から構成される。本研究では、“在”と“有”構文における定・不定の認知を考察するという目的で、他の諸要因ができるだけ影響しないように、シンプルな文を提示して、容認度を測定する。例文を構成する主語と目的語は、“幼儿园”（幼稚園），“花”（花），“屋子”（部屋），“手表”（時計）などの無生名詞を選択し、“那”を用いて定形を表す。作成した例文および日本語の対訳を表1に記した。

表1 本研究に使用した3分類12構文および調査文の例

構文種類	各下位分類	調査例	日本語対応訳
“在”構文	定+在+定	那张地图在那面墙上。その地図はその壁の上にある。	
	定+在+不定	那张地图在墙上。その地図は壁の上にある。	
	不定+在+定	地图在那面墙上。地図はその壁の上にある。	
	不定+在+不定	地图在墙上。地図は壁の上にある。	
“有”構文	定+有+定	那所幼儿园有那朵花。その幼稚園はその花がある。	
	定+有+不定	那所幼儿园有花。その幼稚園は花がある。	
	不定+有+定	幼儿园有那朵花。幼稚園はその花がある。	
	不定+有+不定	幼儿园有花。幼稚園は花がある。	
	定P+有+定	那颗树上有那些苹果。その木の上にそれらのリンゴがある。	
	定P+有+不定	那颗树上有苹果。その木の上にリンゴがある。	
	不定P+有+定	树上有那些苹果。木の上にそれらのリンゴがある。	
	不定P+有+不定	树上有苹果。木の上にリンゴがある。	

注：Pは後置詞（方位詞）を示す。「定」は定形、「不定」は不定形を表す。

なお、中国語母語話者による中国語に関する調査であるため、実際の調査紙には、日本語の対訳は記していない（調査紙の詳細は補記を参照）。質問は7ポイント・スケールの容認度判断尺度とした。1は“不自然”、7は“自然”を示し、1から7に向かって、容認度が高くなっていく形式を採る。たとえば、“那颗树上有苹果。”（その

木の上にリンゴがある。) という文に対して、1 から 7 までの尺度から、中国語母語話者に容認度の度合いを表す整数を一つ選んでもらった。なお、42 文は、ランダムに提示した。

3 分析結果

3. 1 記述統計の結果およびクロンバックの信頼度係数

容認度判断が適切に行われているかどうかの基準として 6 つのダミー文を調査紙にランダムに挿入した。完全に容認されるべき 3 文は、平均容認度が最高の 7 にきわめて近く 6.90 であった。また、完全に否定されるべき 3 文は、平均容認度が最低の 1 にきわめて近く 1.29 であった。したがって、本研究の 81 名の中国語母語話者は、適切に文を判断しているといえる。

36 文の容認度の平均、標準偏差、最大および最小値は表 2 に示した。中国語母語話者 81 名に行った 36 文の容認度テストの全体の平均は 4.91、標準偏差は 0.68 であった。容認度判断テストのクロンバックの信頼度係数 (α)²⁾は 0.87 であり、非常に高い値であった。さらに、容認度判断調査を構成した 3 分類の 12 構文における 4 つの下位分類の満点、平均、標準偏差、最大値、最小値は表 2 に示した。

後置詞を持つ“在”構文の容認度判断については、最大値の 84 となり、最小値が 36、平均が 69.60、標準偏差が 9.69 であった。そのうち、各下位分類では、「定形+在+定形」の平均は 13.54、標準偏差は 4.96、「定+在+不定」の平均は 18.94、標準偏差は 3.01、「不定形+在+定形」の平均は 17.84、標準偏差は 3.22、「不定形+在+不定形」の平均は 19.28、標準偏差は 2.20 であった。また、後置詞を持たない“有”構文の容認度判断は、最大値が 67 から最小値の 23 までの範囲に分布し、平均が 45.93、標準偏差が 10.22 であった。そのうち、4 つの下位分類では、「定形+有+定形」の平均は 9.09、標準偏差は 4.37、「定形+有+不定形」の平均は 17.01、標準偏差は 3.39、「不定形+有+定形」の平均は 8.85、標準偏差は 3.55、「不定形+有+不定形」の平均は 10.98、標準偏差は 3.77 であった。

それに対し、後置詞（以下は方位詞と記す）を持つ“有”構文の容認度判断テストは、最大値が 81 から最小値の 39 までの範囲に分布し、平均が 61.30、標準偏差が 9.33 であった。そのうち、4 つの下位分類では、「定形（方位詞付加）+有+定形」の平均は 9.90、標準偏差は 4.49 であった。「定形（方位詞付加）+有+不定形」の平均は 18.89、

標準偏差は 3.10、「不定形（方位詞付加）＋有＋定形」の平均は 12.58、標準偏差は 4.32、「不定形（方位詞付加）＋有＋不定形」の平均は 19.93、標準偏差は 1.91 であった。

表 2 容認度判断における 3 分類 12 構文の各下位分類の記述統計の結果

3分類12構文	満点	平均	標準偏差	最大値	最小値	α
“在” 構文	84	69.60	9.69	84	36	
定＋在＋定	21	13.54	4.96	21	3	
定＋在＋不定	21	18.94	3.01	21	6	
不定＋在＋定	21	17.84	3.22	21	6	
不定＋在＋不定	21	19.28	2.20	21	11	
“有” 構文	84	45.93	10.22	67	23	
定＋有＋定	21	9.09	4.37	20	3	
定＋有＋不定	21	17.01	3.39	21	8	0.87
不定＋有＋定	21	8.85	3.55	15	3	
不定＋有＋不定	21	10.98	3.77	21	3	
“有” 構文	84	61.30	9.33	81	39	
定P＋有＋定	21	9.90	4.49	21	3	
定P＋有＋不定	21	18.89	3.10	21	8	
不定P＋有＋定	21	12.58	4.32	21	3	
不定P＋有＋不定	21	19.93	1.91	21	12	

注：P は方位詞を示す。「定」は定形、「不定」は不定形を表す。

3. 2 回帰木分析による結果

回帰木分析 (regression tree analysis) の統計手法を用いて中国語母語話者による容認度を予測した (PASW 18.0 の Classification Tree を使用)。回帰木分析は決定木分析 (decision tree analysis) の一種であり、複数の量的・質的説明変数を用い、量的変数を予測する多変量解析の手法である。本研究では、予測される従属変数の容認度は量的変数であり、予測する側の独立変数 (または予測変数) は定形・不定形および方位詞の有無で、質的変数である。この統計手法では、予測結果が樹形図で描かれる。つまり、複数の説明変数の中から目的変数を有意に予測できるものを選び、子ノードの形で成長させていく解析法である。このような解析法を使うと、中国語母語話者が不定を認知する際の諸要因を、階層的に検討して樹形図で示すことができる (先行研究としては、Tamaoka, Lim, Miyaoka & Kiyama 2010 などを参照)。

本研究は、“在” 構文、または “有” 構文の 2 種類の構文に対する容認度について、

後置詞句内の定形または不定形と名詞句内の定形または不定形がどのように影響するのかを予測するため、回帰木分析を用いた。“在”構文の場合は、主語に位置する成分の定形・不定形と目的語に位置する成分の定形・不定形を2つの予測変数とし、容認度にどのような違いがあるのかを予測した。一方、“有”構文の場合は、主語方位詞の使用の有無、主語に位置する成分の定形・不定形および目的語に位置する成分の定形・不定形を3つの予測変数として、容認度を予測した。以下、“在”構文と“有”構文のそれぞれの予測結果を報告する。

3. 2. 1 “在”構文での定形・不定形に関する容認度の回帰木分析の結果

“在”構文の回帰木分析の結果は、図1の樹形図に示した通りである。樹形図の上にくる変数が、容認度をより強く予測する。本研究の“在”構文の容認度を決めるもっとも強い要因は「目的語の定形・不定形」であった[$F(1, 970)=133.20, p<.001$]。図1から分かるように、容認度の親ノード(ノード0)から子ノードの「目的語の定形」(ノード1)と「目的語の不定形」(ノード2)に枝が分かれている。容認度の平均から、定形の目的語($M=5.23$)よりも不定形の目的語($M=6.37$)のほうが、有意に容認度が高いことが分かる。つまり、不定形を持つ目的語が定形よりも中国語母語話者に好まれる傾向を示している。

さらに、目的語が定形の場合、「主語の定形・不定形」との交互作用がみられた[$F(1,484)=82.89, p<.001$]。そして、目的語が定形である子ノード(ノード1)からさらに「主語の定形」(ノード3)と「主語の不定形」(ノード4)に分けている。不定形である主語の容認度($M=5.95$)は定形である主語($M=4.51$)と比べ、有意に高かった。それに対し目的語が不定形である場合(ノード2)、主語の定形・不定形によって容認度に有意な違いがないことから、さらなる枝分かれはない。つまり、中国語母語話者にとって、“在”構文の場合、目的語は不定形にした文が最も好まれ、主語は不定形で表現されても、違和感がないことを示している。

一方、目的語が定形である場合は、目的語が不定形である場合よりも容認度がやや落ちる。しかし、主語が不定形になると、目的語が定形であっても、容認度の平均が5.95となるので、決して低い数値とはいえない。容認度の高い組み合わせの順に並べると、「不定形+在+不定形」=「定形+在+不定形」>「不定形+在+定形」>「定形+在+定形」となる。“在”構文の主語・目的語の定形・不定形の選択におけ

る容認度を要約すると、まず、主語が定形か不定形かに関係なく、目的語が不定形である場合には容認度が高くなる。しかし、目的語が定形である場合には、主語が不定形であるほうが定形であるよりも容認度が高くなるという結果であった。

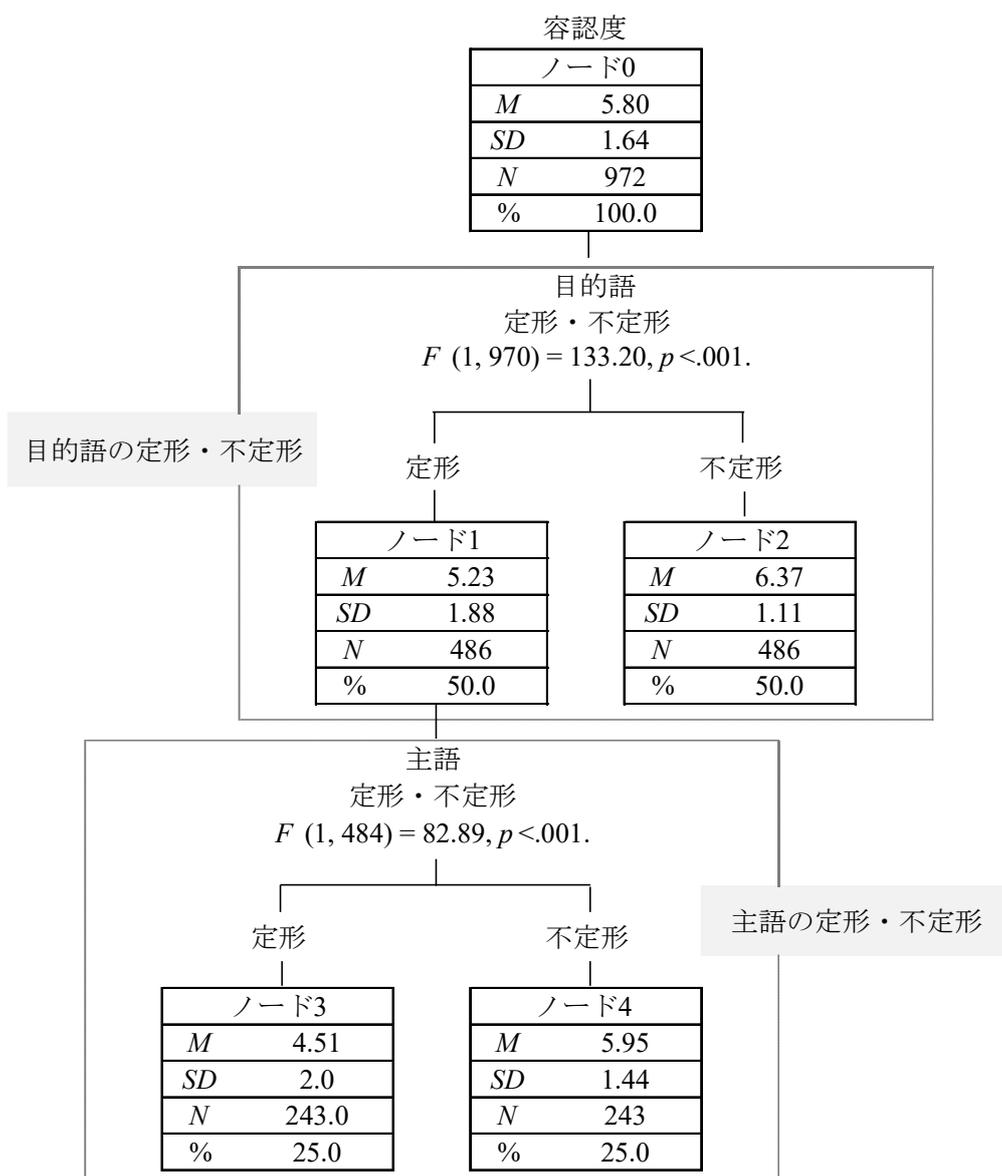


図1 “在”構文における定形・不定形の要因についての回帰木分析

3. 2. 2 “有”構文での定形・不定形に関する容認度の回帰木分析の結果

“有”構文の回帰木分析の結果は、図2の樹形図に示した。“在”構文の場合と同じように、“有”構文においても、容認度を最も強く予測した変数は、目的語の定形・

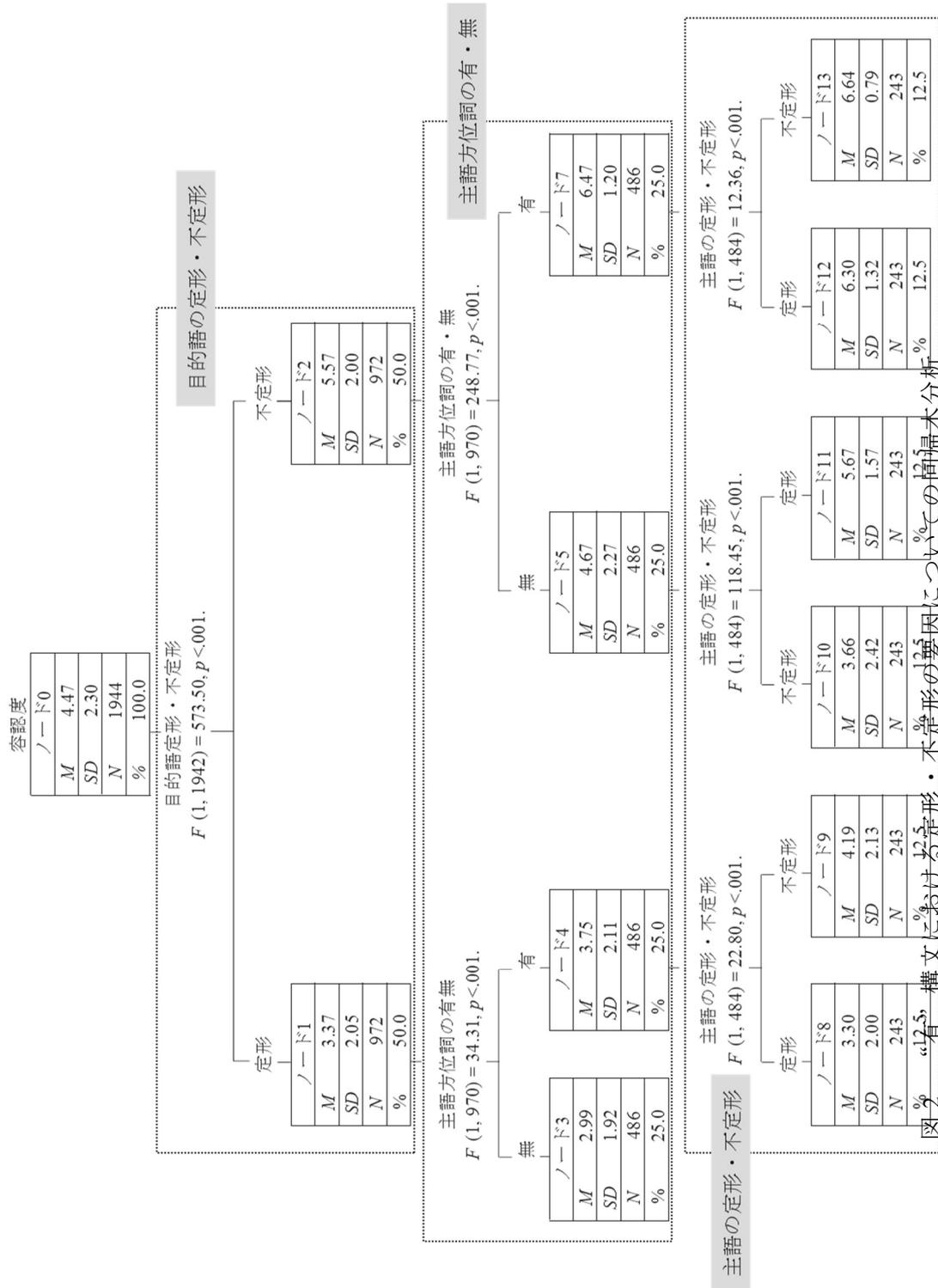
不定形であった[$F(1,1942)=573.50, p<.001$]。ノード 0 から、ノード 1 の「目的語の定形」($M=3.37$) とノード 2 の「目的語の不定形」($M=5.57$) に分かれた。容認度の平均から、目的語が不定形である場合のほうが定形であるよりも有意に高く、自然であるとされた。

また、目的語が定形[$F(1, 970)=34.31, p<.001$]である場合と目的語が不定形[$F(1, 970)=248.77, p<.001$]である場合は、それぞれ「主語方位詞の使用有無」との交互作用が有意であった。主語が方位詞を伴い定形の目的語である“有”構文 ($M=3.75$) は、主語が方位詞を使わず定形である目的語の“有”構文 ($M=2.99$) よりも容認度が有意に高かった。とはいえ、いずれの場合も容認度は 4 以下であり、容認度が低い範囲での違いである。

一方、主語が方位詞を伴い不定形である目的語の“有”構文 ($M=6.47$) は、主語が方位詞を伴わず不定形である目的語の“有”構文 ($M=4.67$) よりも、容認度が有意に高くなった。方位詞を使用する“有”構文は、母語話者にとってより自然な文とされる傾向がある。さらに、「目的語の定形・不定形」と「主語方位詞の使用有無」に続いて、「主語の定形・不定形」は、3 番目の要因としてそれぞれ容認度に影響した。子ノード 4 からさらに「主語の定形」の子ノード 8 と「主語の不定形」子ノード 9 に分けている[$F(1,484)=22.80, p<.001$]。子ノード 8 ($M=3.30$) は子ノード 9 ($M=4.19$) より有意に容認度が低かった。

主語が方位詞を伴わず不定形である目的語の“有”構文では、ノード 5 からは、さらに「主語の不定形」の子ノード 10 と「主語の定形」の子ノード 11 に分類された[$F(1,484)=118.45, p<.001$]。そのうち、不定形である主語の容認度 ($M=3.66$) は定形である主語 ($M=5.67$) に比べて、有意に低かった。それに対し、目的語が不定形で主語が方位詞を伴う場合、「主語の定形」の子ノード 12 と「主語の不定形」の子ノード 13 に枝が分かれた[$F(1,484) =12.36, p<.001$]。主語の定形・不定形によって、容認度に有意な違いがみられた。つまり、「定形(方位詞付加)+有+不定形」($M=6.30$) は「不定形(方位詞付加)+有+不定形」($M=6.64$) より容認度が低かったことから、“有”構文の場合、主語と目的語両方を不定形にした場合が母語話者にとって最も自然な文であることが分かる。一方、主語が定形で目的語が不定形である場合は、やや容認度が落ちる。ノード 1 とノード 2 から目的語が定形で表現されるのには違和感があるため、容認度が低くなったのであろう。したがって、容認度の高い順に並べると、「不定

形（方位詞付加）＋有＋不定形」＞「定形（方位詞付加）＋有＋不定形」＞「定形＋有＋不定形」＞「不定形＋有＋不定形」＞「不定形（方位詞付加）＋有＋定形」＞「定形（方位詞付加）＋有＋定形」＞「不定形＋有＋定形」＝「定形＋有＋定形」となる。



以上の結果を要約すると、まず、目的語が不定形であるほうが容認度が高くなる。次に、主語に方位詞がつくほうがより容認される。さらに、主語に方位詞がつく場合は、主語が不定形であるほうがより容認される。しかし、主語に方位詞がない場合は、主語が定形であるほうが容認されやすい。

4 まとめ

先行研究（朱徳熙 1982; 刘月华等 1983、2004 など）によると、中国語の主語は定形で表し、目的語は不定形で表す傾向にあると提唱されてきた。しかし、このような主語定形説について、異議を唱える先行研究もある（范继淹 1985）。そこで、本研究では、“在”および“有”構文に関する81名の中国語母語話者による両構文における定形または不定形の選択に対する容認度判断を実施した。回帰木分析を使って容認度を決める要因を分析した結果は、以下の2点にまとめられる。

第1に、先行研究（朱徳熙 1982; 刘月华等 1983、2004 など）が指摘しているように、本研究の結果も、“在”構文の場合は後置詞句が不定形で、“有”構文の場合、後ろに来る名詞句を不定形にするのがより自然な文とされた。つまり、述語部の目的語が不定形である場合に容認度が高くなることが検証された。中国語の述語部は不定形で表現するのが一般的であるといえよう。

第2に、主語は既知情報として定形をとり（朱徳熙 1982; 刘月华等 1983、2004; 木村 2011）、不定名詞主語文が成立するには、述語部の動詞が複雑な構造をとらなくてはならないという制限があるとされている（范继淹 1985）。ここで、指摘した複雑な構造とは、単独で表現されることがなく、修飾語などを伴うことを指す。しかし、本研究では、主語の定形について、以上の主張と異なった結果を得た。“在”構文では、“咖啡在椅子上。”（コーヒーが椅子の上にある。）のような「不定形+在+不定形」（ $M=6.43$ ）と“那杯咖啡在椅子上。”（そのコーヒーが椅子の上にある。）のような「定形+在+不定形」（ $M=6.31$ ）は、母語話者による容認度に有意な違いは認められず、いずれも自然な文とされ、いずれの容認度が非常に高かった。さらに、構文の意味関係から考えると、無生名詞の“咖啡”（コーヒー）が主語であり、存在を示す自動詞の“在”が後にくる。それに対して、名詞と方位詞で構成される後置詞句“桌子上”（机の上）が、動詞の補部として結合され[$_{VP} V$ (在) [$_{PP} N$ (桌子) P (上)]]、 $_{VP}$ 「空間位置関係」を表す（張婧禕・玉岡 2016）。このようにして主語の存在を描写する機能

を果たすため、主語が不定形である場合と主語が定形である場合は等質であると考えられる。本研究では、雷桂林（2008）の考察結果が妥当であることを示した。

一方、方位詞を持つ“有”構文では、主語が不定形のほうが定形より容認度が高かった。また、方位詞を持たない“有”構文では、主語が定形のほうが不定形より容認されやすかった。“有”構文は主語が省略されており、空主語（empty pro）と想定される[TP ϕ [T' [VP [PP NP] [V' V (有) [NP Adj N]]] T]（張婧禕・玉岡 2016）。方位詞を持つ“有”構文は「空間領属関係」を表す。一方、方位詞を持たない“有”構文は「領属関係」を表す。そこから、「空間領属関係」を表す“有”構文の後置詞句は単に主語の位置にある成分であり、実際は補語の役割を担うと考えられる。こうして、存在物の空間領属を描写することができる。そのため、“那个树上有苹果”（その木の上にリンゴがある。）のような主語が定形の文より、“树上有苹果”（木の上にリンゴがある。）のように不定形のほうが容認度はやや高くなったと考えられる。それに対し、方位詞を持たない“有”構文は「領属関係」、つまり、“那个幼儿园有花”（その幼稚園に花がある。）のように、主語に位置する後置詞句は名詞の定形をとって、「所有または所持」だけの意味を表し、描写の意味が希薄になった。このように文の意味関係から、主語が既知の情報として定形をとらないと、主語に位置する所有者の情報が明確に伝わらないため、容認度は低下したと考えられる。

これまで、中国語学においては、“在”および“有”構文に関する定形または不定形の使用について、用例を基にして議論されてきた。本研究では、多数の中国語母語話者による数値化できる容認度判断に基づいて、回帰木分析により実証的に検証した。容認度判断に最も影響したのは目的語に位置する成分であり、目的語が不定形をとる場合が最も容認度が高かった。しかし、主語に位置する成分の定性（定形か不定形か）の選択には、構文の意味関係が強く影響する傾向がみられた。

〈注〉

- 1) 一般には、決定木分析（decision tree analysis）といわれるが、さらに2つに分類され、予測変数が頻度の場合には分類木分析、連続変数（スケール）の場合には回帰木分析で解析する。本研究では、容認度を連続変数と想定したので回帰木分析を使用した。
- 2) クロンバックの信頼度係数とは、尺度に含まれる個々の質問項目が内的整合性を

持つかどうかを判定するために用いられる。つまり、同じテストを繰り返し行ったときに、同じ結果が得られるかどうかを示す再現性の指標である。信頼度係数の α が、0.80 以上であれば、十分な一貫性があると判断される。

〈参照文献〉

- 木村英樹 2011. 「『存在文』が表す〈存在〉の意味および“定不定”の問題」『漢語与漢語教学研究』2, pp.3-15.
- 朱德熙（著）、杉村博文・木村英樹（訳）2000. 『文法講義—朱德熙教授の中国語文法要説』, 白帝社.
- 張婧禕・玉岡賀津雄 2016. 「“在”および“有”構文による空間表現の統語構造」『ことばの科学』30, pp.21-38.
- 雷桂林 2008. 「不定名詞主語文の場面描写機能」『中国語学』255, pp.137-156.
- 范继淹 1985. 〈无定 NP 主语句〉《中国语文》5, pp.312-328.
- 刘月华・潘文娛・故韡 1983. 《实用现代汉语语法》, 外语教学与研究出版社.
- 刘月华・潘文娛・故韡 2004. 《实用现代汉语语法（增订本）》, 商务印书馆.
- 朱德熙 1982. 《语法讲义》, 商务印书馆.
- 朱德熙 1999. 《朱德熙文集第1卷：语法讲义；语法答问；定语和状语》, 商务印书馆.
- 于善志・苏佳佳 2011. 〈There be 存在句习得中的定指效应研究〉, 《外语教学与研究（外国语文双月刊）》43(5), pp.712-725.

Tamaoka, K., Lim, H., Miyaoka, Y., & Kiyama, S. (2010). Effects of gender-identity and gender-congruence on levels of politeness among young Japanese and Koreans. *Journal of Asian Pacific Communication*, 20, 23-45.

〈補記〉

調査内容

番号	調査文	容認度尺度
1.	那所幼儿园有那朵花。	1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6 — 7 不自然 自然

- | | | | |
|-----|-------------|---------------------------|----|
| 2. | 那间屋子有那块手表。 | 1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6 — 7 | |
| | | 不自然 | 自然 |
| 3. | 那张地图在那面墙上。 | 1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6 — 7 | |
| | | 不自然 | 自然 |
| 4. | 那颗树上有那些苹果。 | 1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6 — 7 | |
| | | 不自然 | 自然 |
| 5. | 那杯咖啡在那把椅子上。 | 1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6 — 7 | |
| | | 不自然 | 自然 |
| 6. | 那间洗手间里有那盏灯。 | 1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6 — 7 | |
| | | 不自然 | 自然 |
| 7. | 我在学校看了3本书。 | 1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6 — 7 | |
| | | 不自然 | 自然 |
| 8. | 那艘船在那个码头上。 | 1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6 — 7 | |
| | | 不自然 | 自然 |
| 9. | 那张桌子上有那本书。 | 1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6 — 7 | |
| | | 不自然 | 自然 |
| 10. | 那个地方有那个峡谷。 | 1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6 — 7 | |
| | | 不自然 | 自然 |
| 11. | 那所幼儿园有花。 | 1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6 — 7 | |
| | | 不自然 | 自然 |
| 12. | 那间屋子有手表。 | 1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6 — 7 | |
| | | 不自然 | 自然 |
| 13. | 那张地图在墙上。 | 1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6 — 7 | |
| | | 不自然 | 自然 |
| 14. | 那颗树上有苹果。 | 1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6 — 7 | |
| | | 不自然 | 自然 |
| 15. | 那杯咖啡在椅子上。 | 1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6 — 7 | |
| | | 不自然 | 自然 |
| 16. | 那间洗手间里有灯。 | 1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6 — 7 | |
| | | 不自然 | 自然 |

17. 那艘船在码头上。 1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6 — 7
不自然 自然
18. 我的大没有他教室的。 1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6 — 7
不自然 自然
19. 那张桌子上有书。 1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6 — 7
不自然 自然
20. 那个地方有峡谷。 1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6 — 7
不自然 自然
21. 幼儿园有那朵花。 1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6 — 7
不自然 自然
22. 屋子有那块手表。 1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6 — 7
不自然 自然
23. 地图在那面墙上。 1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6 — 7
不自然 自然
24. 树上有那些苹果。 1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6 — 7
不自然 自然
25. 咖啡在那把椅子上。 1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6 — 7
不自然 自然
26. 洗手间里有那盏灯。 1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6 — 7
不自然 自然
27. 明天周末上班不是。 1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6 — 7
不自然 自然
28. 船在那个码头上。 1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6 — 7
不自然 自然
29. 桌子上有那本书。 1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6 — 7
不自然 自然
30. 地方有那个峡谷。 1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6 — 7
不自然 自然
31. 幼儿园有花。 1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6 — 7
不自然 自然

- | | | | |
|-----|-----------|---------------------------|----|
| 32. | 屋子有手表。 | 1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6 — 7 | |
| | | 不自然 | 自然 |
| 33. | 地图在墙上。 | 1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6 — 7 | |
| | | 不自然 | 自然 |
| 34. | 树上有苹果。 | 1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6 — 7 | |
| | | 不自然 | 自然 |
| 35. | 咖啡在椅子上。 | 1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6 — 7 | |
| | | 不自然 | 自然 |
| 36. | 洗手间里有灯。 | 1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6 — 7 | |
| | | 不自然 | 自然 |
| 37. | 他的房间比我的大。 | 1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6 — 7 | |
| | | 不自然 | 自然 |
| 38. | 船在码头上。 | 1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6 — 7 | |
| | | 不自然 | 自然 |
| 39. | 桌子上有书。 | 1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6 — 7 | |
| | | 不自然 | 自然 |
| 40. | 今天是爸爸的生日。 | 1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6 — 7 | |
| | | 不自然 | 自然 |
| 41. | 地方有峡谷。 | 1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6 — 7 | |
| | | 不自然 | 自然 |
| 42. | 图书馆在书看我不。 | 1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6 — 7 | |
| | | 不自然 | 自然 |